

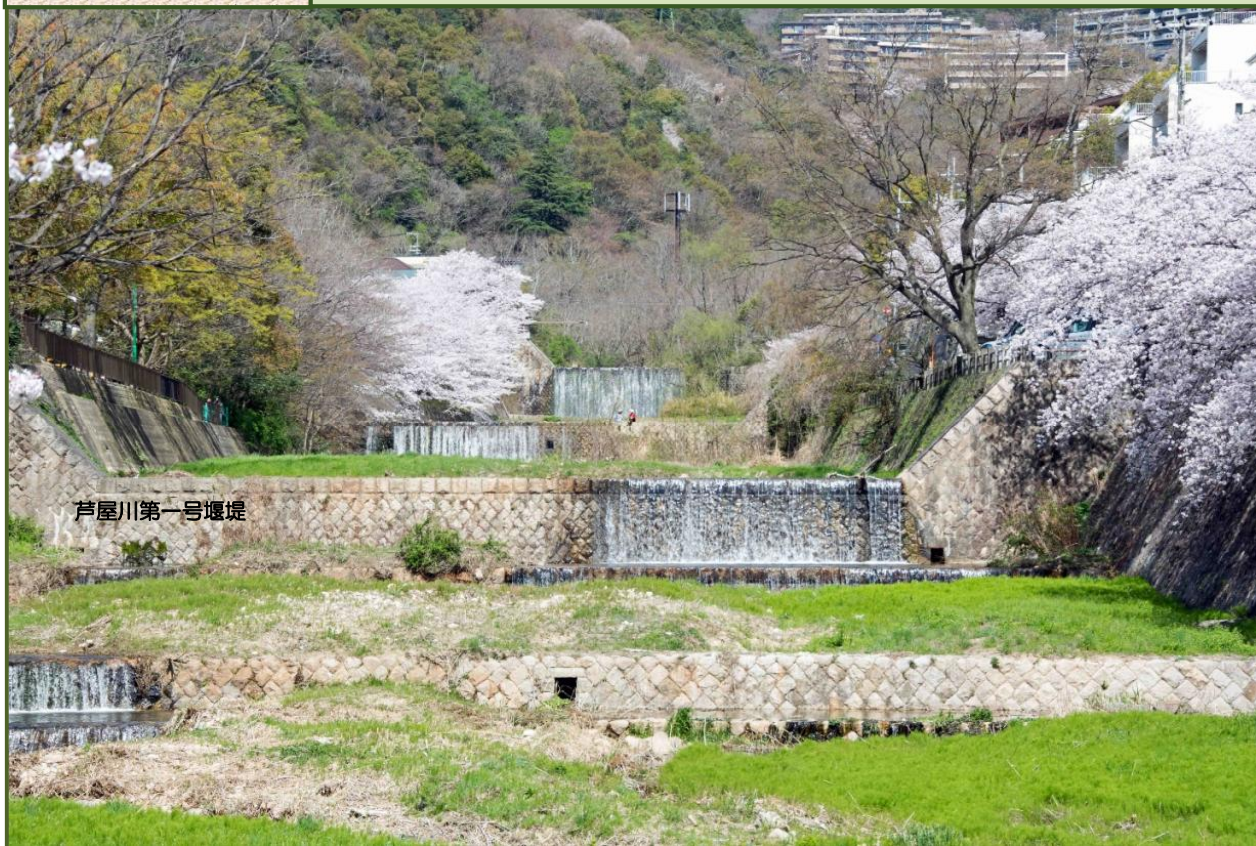


写真-1 高座川合流点付近の道路から芦屋川の砂防堰堤群を撮影（平成30年4月）

■ 阪神大水害からの復興の要～砂防堰堤

写真-1は、芦屋川の右支川・高座川の最下流に架かる大僧橋付近の市道から芦屋川上流の砂防堰堤群を撮影したものです。これらの堰堤群は、昭和13（1938）年7月の阪神大水害後に建設されたもので、手前から、芦屋川第一号堰堤、杖束（つえひがし）堰堤、河原毛（かわらげ）堰堤です。

杖束堰堤は、兵庫県によって昭和16（1941）年度に建設されたもので、河原毛堰堤は昭和16（1941）年6月に、芦屋川第一号堰堤は昭和15（1940）年4月に、いずれも内務省神戸土木出張所によって建設されています。



写真-2 河原毛堰堤

■ かつて芦屋川においても多くの水車が稼働していた

六甲山地南麓では、江戸時代中期から急流を利用した産業用の巨大水車が数多く稼働していました。芦屋川でも多くの水車が設置され、搾油や粉挽に利用されていました。

芦屋の水車に関連する最も古い記録は、宝永4（1707）年の打出村善四郎による水車設置の願書です。この水車がどのような作業に用いられていたのかは不明ですが、それ以降、水車に関連する記録が数多く見られるようになります。その中には当時の水車の作業内容を知ることができる文献も含まれており、例えば、明和6（1769）年の『芦屋村差出明細帳』には、芦屋村に搾油水車が6輛、米踏・粉挽水車が5輛あったことが記されています。また、天明8（1788）年の『御巡見様御通行御用之留帳』には、芦屋村に搾油水車10輛、粉挽水車1輛、三条村に米踏水車2輛があったと記されています。

両文献を比較すると、芦屋村では水車の数が 11 輦と変化が認められないにもかかわらず、搾油水車が 6 輦から 10 輦に増加していることから、18 世紀後半の芦屋村では、水車によって菜種油が盛んに生産されていたことがわかります。

図-1 は、安政 4 (1857) 年に描かれた「芦屋川水車絵図」(芦屋市提供)で、芦屋川掛りの水車 20 輦の持主と設置位置およびそれらを結ぶ水路などが描かれています。

持主は芦屋村・三条村・打出村のほか西宮や大坂の資本家も所有していたようです。これらの水車は、主に菜種・綿実の油搾りや酒米の精米に使用されていました。

なお、写真-5 の山芦屋町で発掘された水車場跡は、右絵図に示す水車場マークの上から 15 番目(赤い矢印で明示)と思われます。



写真-3 芦屋川沿いに水車が回っていた頃の樋 (1920 年)
(『芦屋川の歴史』から引用)

写真-3 は、大正 9 (1920) 年、芦屋川流域(城山の麓)の水車に水を送る樋を撮ったものです。

明治時代以降の水車場の動向は、当時の地形図に記された水車場を示す記号から推測することができます。これによると、芦屋村と三条村を合わせた水車記号  の数は、

明治 18 (1885) 年：15 ヶ所
大正 3 (1914) 年：10 ヶ所
昭和 7 (1932) 年：5 ヶ所

と推移しており、この数字から芦屋においても水車場が減少していく様子が読み取れます。

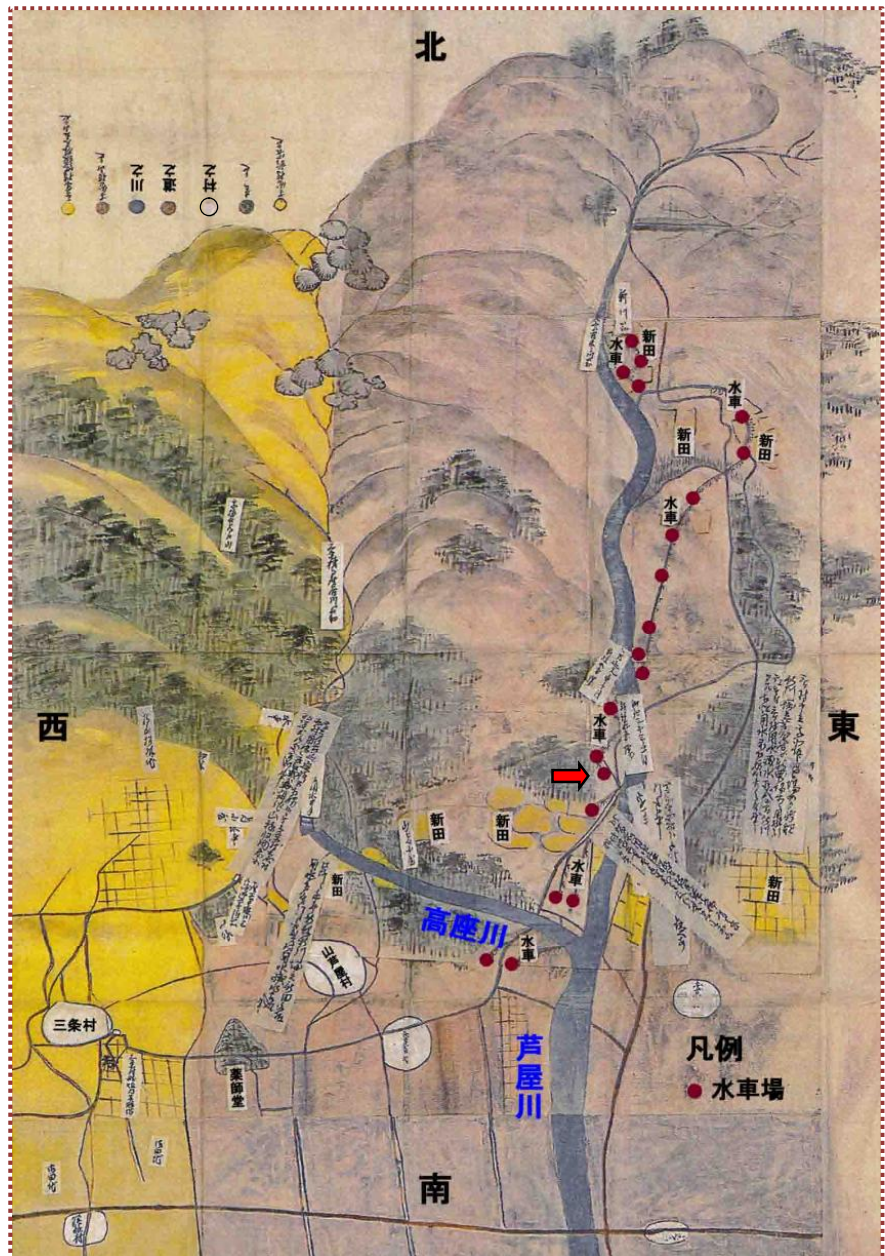


図-1 「芦屋川水車絵図」(芦屋市提供)を加工



写真-4 芦屋川東岸にあった水車場(絵葉書:大正10年代~昭和初期発行)

そして残った水車場も終戦前にすべて稼働を終えています。

写真-4 は、現在の東芦屋町を北東側から撮影したもので、中央に連なる樹々は芦屋川沿いの松林です。左端の細長い建物が水車場で、水車は建物内に設置されており、水車に掛ける水を導く木樋が屋根の真ん中を貫いています。

■ 芦屋川水車場跡

平成 18（2006）年に芦屋市山芦屋町の城山山裾において、開発（低層マンション建設）に伴う大規模な発掘調査が行われた際に水車場跡が見つかりました。この水車場跡は、大正時代まで稼働していたもので、築造時期は江戸時代まで遡るものと推定されています。

ここでは、水車が設置されていた滝壺、水車に掛けられた水を排出する暗渠、半地下式の作業部屋などが確認されています。水車の大きさは、滝壺の大きさから直径 5m 前後と推定され、排水用の暗渠は、滝壺の東壁南部に石組の入り口を設けて、そこから東方へ伸びています。半地下式の作業部屋は、滝壺の西側に設けられていて、その大きさは東西約 3.6m、南北約 5.4m、深さ約 1m です。作業部屋は建物に覆われており、柱穴や石臼を据えた穴も見つかっています。



写真-5 発掘調査で明らかになった芦屋川水車場跡
（『芦屋川の歴史』から引用・加工）

現在、水車場跡は記録保存され、跡地には既にマンションが建っています。エントランスには石臼がモニュメントとして置かれ、敷地内の一角に以下のような説明が記されたプレートが石にはめ込まれています。

「この敷地では、平成 18 年に発掘調査が実施され、芦屋市内で初めて水車場跡が見つかりました。この水車場跡は、大正時代まで営まれていたもので、築造時期は江戸時代後半期（18～19 世紀）まで遡ると推定されています。発掘調査で見つかった水車場の構造施設の中で滝壺の一部をここに移設しました。平成 20 年 2 月」

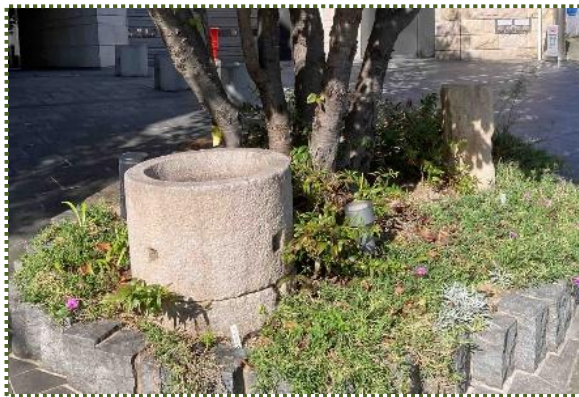


写真-6 マンションのエントランスに置かれた石臼



写真-7 説明プレートと背後の滝壺の石

■ 水車場の記憶を今に伝える石臼

今では芦屋川周辺に水車場を見ることはできませんが、図-1 の絵図に示された水車場付近を歩くと、石臼が埋め込まれた石垣が目に入り、往時の面影を偲ぶことができます。

① 山芦屋町に残る水車場の石臼

山芦屋町では、かつて数ヶ所の水車場があって、多くの石臼で菜種を搾ったり酒米を搗いたりしていました。水車場が稼働を終えて不用になった石臼は、重いので水車場周辺の住宅の石垣などに再利用されています。

写真-8 の石臼が埋め込まれた石垣の写真は多くの資料に使われていますが、当該石垣は車庫設置のため既に取り壊されていて、残念ながら見ることはできません。

同じく山芦屋町の民家裏の石垣(写真-9:長さ約 30m)には、数個の石臼が埋め込まれています。また、この民家のすぐ北の民家の石垣にも石臼が埋め込まれているそうですが、敷地内が工事中だったので確認できませんでした。

そして、上記マンションの東の道を少し北に行くと、道端に石臼が2基(写真-10)あり、その背後の石垣には多くの石臼が埋め込まれている(写真-11)はさすが、草木で覆われていて一部しか確認できませんでした。



写真-8 石臼が埋め込まれた石垣
(平成 30 年 3 月撮影、取り壊されて今はない)



写真-9 民家裏の石垣に埋め込まれた石臼



写真-10 山芦屋町の民家の庭先に置かれた石臼



写真-11 石臼が埋め込まれた石垣(山芦屋町)

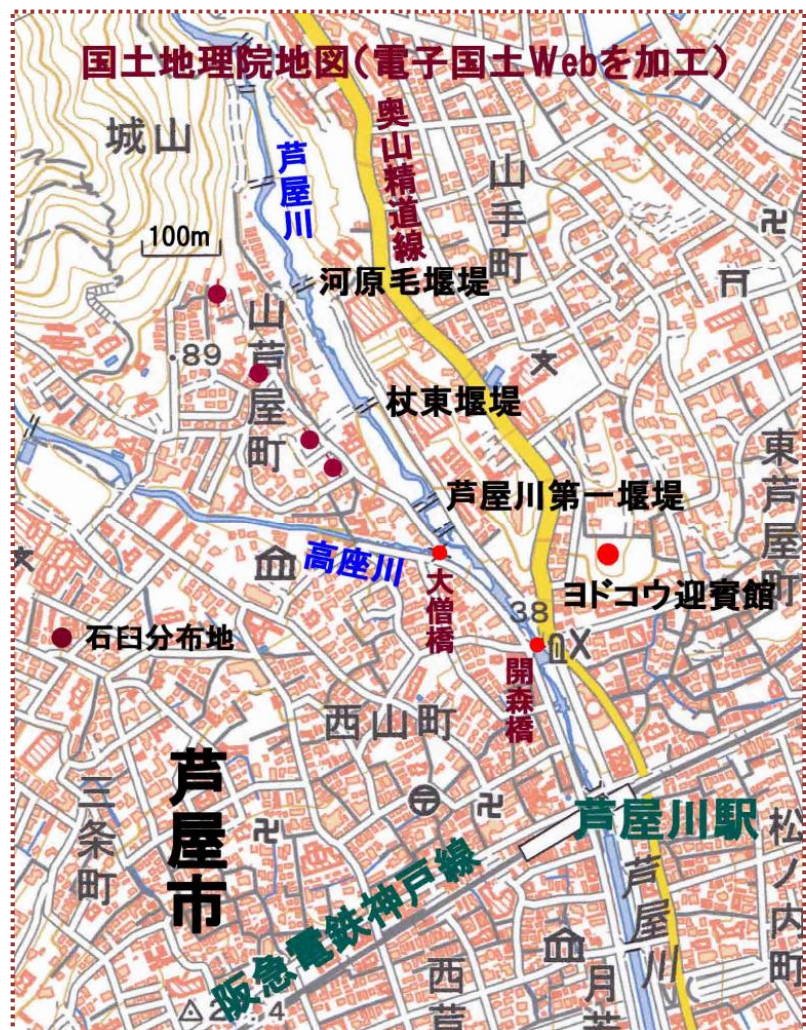


図-2 芦屋川沿いの石臼分布地

②「若宮まちかどひろば」の石垣に水車場で使われていた石臼が2個

阪神電鉄・打出駅の西約 400m の芦屋市若宮町 1(宮川地藏通り沿い)に「若宮まちかどひろば」があります。そこには工事の時に出てきた石や古い石を再利用して組まれた石垣があります(写真-12・13)。

これらの石はいずれも花崗岩で、ピンク色の粒が混じったものもあり、昔から「御影石」や「桜御影」と呼ばれていました。

古くから別荘のお屋敷で使われていた手水鉢や西芦屋町のお屋敷で使われていた靴ぬぎ石、江戸時代、大坂城の石垣に使用するために採掘され、結局使われずに六麓荘町で発掘された刻印石、阪神国道（現・国道 2 号）に路面電車が走っていた頃に敷かれていた瀬戸内海の島で採掘された石などに混じって、かつて山芦屋町にあった水車場で使われていた石臼が 2 個組み込まれています。



写真-12 「若宮まちかどひろば」の石垣



写真-13 「若宮まちかどひろば」の石垣

■ モノローグ

10 月末の天気の良い日に、山芦屋町の石臼のある箇所を確認しながら歩きましたが、坂道なので結構疲れました。その後、一度行ってみたかった「ヨドコウ迎賓館」に立ち寄ることに。

近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトが手掛けた旧山邑家住宅で、令和 6（2024）年が竣工 100 周年にあたります。入口で入館料 500 円を払おうとしたら、受付の方が「申し訳ございません。只今停電で中が暗いので入館料は結構です。どうぞご自由に見学してください」とのこと。

この建物は六甲山から伸びる斜面地形を生かして階段状に建てられています。特徴の一つとして、外だけでなく中も幾何学的な彫刻を施した大谷石が使われていて、その柔らかな質感が何ともいえず、採光のための大小の窓のデザインも素晴らしい上に、バルコニーからの眺望もよく、遠く大阪湾を眺めることができます。そして、今回歩いた城山の裾に広がる山芦屋の豪邸もよく見えました。

ただ、気になったのが芦屋断層の存在です。『兵庫県地質図（南部）』によると確定度Ⅰの活断層で、城山の山麓付近を NE-SW の方向に走っています。気にしすぎる必要はありませんが、耐震補強はしっかりやっておきましょう。

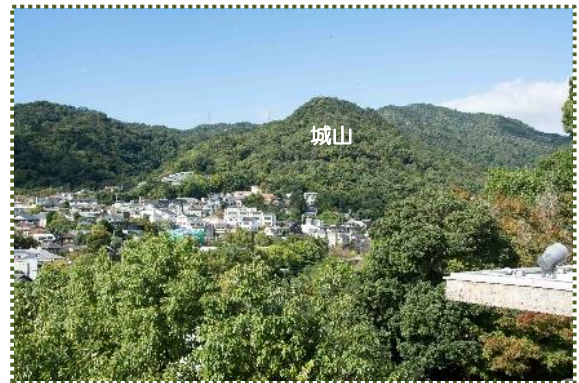


写真-14 ヨドコウ迎賓館のバルコニーから城山を望む

トウワタ（唐綿）

キョウチクトウ科（旧分類ではガガイモ科）トウワタ属の多年草。原産地は南アメリカ。寒さに弱いので、日本では一年草として栽培される。天保 13（1842）年に渡来したとされ、和名は種子の冠毛に由来する。花期は夏から秋。花は橙紅色で花冠が 5 裂し、裂片は反卷（はんけん）、頂生散形花序である。全草に有毒配糖体 *asclepidin* を含み、生葉は駆虫・発汗に、花は止血に、根は催吐性を有する *vincetoxin* を含む根はトコンの代用品とされる。茎からは織物に使える繊維が得られ、種子は枕などの詰め物とされる。



写真-15 トウワタ（山芦屋町の民家の庭先に咲いていた）

【参考資料】

- 1 『芦屋川水車場跡と城山古墳群第 20 号墳の発掘調査成果』 芦屋市教育委員会 平成 18 年 4 月
<https://www.gensetsu.com/O60430asiya/doc8.htm>
- 2 『芦屋の文化財』 芦屋市 HP
https://www.city.ashiya.lg.jp/gakushuu/documents/bunkazaihb_bunkazai.pdf
- 3 『芦屋川の歴史』 芦屋市教育委員会編 平成 25 年 3 月
- 4 『芦屋川水車絵図』 芦屋市 HP
<https://www.city.ashiya.lg.jp/gakushuu/bunkazai/kakonooshirase.html>
- 5 『芦屋郷土誌』 細川道草編 昭和 38 年 11 月
- 6 『精道村のあゆみ～郊外住宅地・芦屋の幕開け～』 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課編 令和 2 年 3 月
- 7 『広報あしや No.954～地場産業を支えた芦屋川水車場跡』 芦屋市 平成 18 年 12 月
<https://www.city.ashiya.lg.jp/kouhou/kensaku/h18/documents/O6121523.pdf>
- 8 『若宮まちかどひろばの石材』 芦屋市 HP 令和 4 年 3 月
https://www.city.ashiya.lg.jp/gakushuu/bunkazai/rekishibunkaisan/wakamiya_sekizai.html
- 9 『兵庫県地質図(南部)』 兵庫県土木地質図編纂委員会編 平成 8 年 3 月
- 10 『トウワタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 7 (2025) 年 2 月 『ひょうご水百景』 No.215

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.215